

山と博物館

第 8 卷 第 8 号

1963年9月25日



カモシカ “青太郎” 君

6月12日 青森県下北郡大畑営林署で保護されていたカモシカ(推定生後3カ月)は9月15日大町に元気な姿を見せた。大畑—三沢間汽車。三沢—羽田間全日空機。新宿—大町間汽車と1000Kmの旅であった。

大 町 山 岳 博 物 館

資料 白馬岳小史 (3)

白馬連峰史料年譜 (2)

長 沢 武

1893	明治 26.3	小山佐伝治輯「信濃全図」には図法。山としては松川入りに連華山がある他、有明山、蝶ヶ岳、鎗ヶ岳、總高、乗鞍岳を見るのみ。
1894	〃 26	陸地測量部、白馬岳に一等三角点挿点。係官は館澤彦。(寺田寅彦「地図をながめて」)
	〃 27	高柳精一「越中地理問答」。「大連華山は国内第一の高山にして尤も世に名を知られたるを立山とす」とある。
	〃 27	志賀重昂「日本風景論」刊。邦書で氷河問題にふれた最初の書。
	〃 27	「新撰信濃地誌」太田健雄編、山岳高度表中、第4位蓮花山(北安曇郡)9,683尺(2,933m)とあるは中々立派、但し順位は誤りで、正確には県内第18位
	〃 27	ウエストン、ハミルトン、案内浦口某、山崎巡査及人夫は平岩より連華温泉を経て白馬に登り、再び連華温泉に下り千国掲げを下り瀬に出、大町に向う。
1895	〃 28.8	小杉復堂、柳又広河原を経て猫の踊場に出、清水を通り白馬に登る。(復堂は越中の人「游大連華山記」漢文で名文である。)(山岳26年3号)
1896	〃 29	ウエストン「日本アルプス登山と探険」刊。白馬岳登山(文中大連華山)の記録が載っている。
1896	〃 31.8	大町小学校長河野齡蔵、教員岡田邦松、松川小学校長吉沢秀吉氏白馬岳へ登る。山頂で一泊。植物採集しヤリ岳、ヤリ温泉を経て下山。翌32年5月信濃教育153号に「白馬岳に登る記」発表。この時の採集で、シロウマアサツキ、ムシトリスマレ、タカネイバラ、ハゴロモギク、クロユリの新発見。岡田氏の記録は尋常小学校国語読本巻9に「白馬岳」として載る。
1899	〃 32.8	河野齡蔵氏白馬岳山頂にウルップソウ発見。(信濃博物誌36号m44.12)
1901	〃 34	矢沢米三郎、北安曇教育会を卒いて団体登山、幾つかの植物の新発見をする。
	〃 34	白馬銅山開く。白馬尻、惣平に小屋掛けして登山者に便を与う。
	〃 34	富山県小学校課外教科書「越中地理歴史」下新川郡の部に、大蓮花、小蓮花、後立山鎗、雪倉高峻にして大蓮花は國中第一の高山なり、三郡にまたがり2934mで白馬岳と称せらる。(地質調査所図には白馬岳とあり、測量部図には大蓮花山とある)
1902	〃 35	山崎直方博士白馬に登り、「氷河果して本邦に存在せざりしか」で氷河論を起す。矢部吉績、安田篤氏相次いで白馬へ登る。
	〃 35.8	田中貢一植物採集登山、ヤリ岳で新種クモマキンボウゲ、タカネキンボウゲ、シロウマナズナ、シロウマワウギ発見。(信濃博物誌7号m36.10)
1902	〃 35.8	城敷馬氏、子しゃく青木信光。日光植物園主五百城文哉氏と白馬登山。(全上)
1903	〃 36	矢沢米三郎(ミヤマタラビ発見)田中貢一、折井最一白馬へ植物採集登山。
1904	〃 37	寺崎留吉、矢崎斉知郎、上野卯三郎、春原平八郎、倉島賢二郎、安田篤等白馬に登る(いづれも植物採集登山)
	〃 37.8	志村烏嶺、第一回白馬登山。四ツ谷より人夫4人を雇い、植物採集と写真撮影に重点をおき登る。山頂一泊。ヤリ温泉廻り南股一泊下山。ヒメウメバチソウ、シロウマワウギ発見。この登山の写真はロンドンアルパインジャーナルに載った我国最初の写真である。当時白馬山頂の小屋は測量部員の使用した、2間四方の石室が湧水の東にあったのみ。(志村烏嶺「やま!」)(大平景、山岳第2年第一号)
1905	〃 38	日本山岳会創立。
	〃 38.8	志村烏嶺。8月5日と20日の二回に亘り、四ツ谷より白馬登山。翌39年8月には糸魚川より連華温泉を経て登る。(「やま!志村烏嶺より」)
	〃 38.8	武田久吉白馬岳にて新種高山蝶クモマベニヒカゲ採集。(山岳6年一号m,44.7)
	〃 39	「山岳」創刊。白馬岳は全国に知られて、北海道、広島からの登山者もあり(信濃博物誌22号)

- 〳 39.8 大町対山館主, 百瀬慎太郎氏白馬登山, 当年14才なり。
 〳 39.2 「日本山嶽誌」高頂式編
 〳 39.4 「北安曇地誌」北安曇教育会編, 山嶽誌の項に, 槍ヶ岳, 長野県統計書此ノ山ヲ白馬岳又ハ鹿島岳トセルハ誤ナリ, 山脈南大黒岳ニ連ル。杓子岳ハ槍ヶ岳ノ北ニアリ。白馬岳は(明治20年以來長野県統計書ニ我郡ニ蓮花岳アリ, 國中第三ノ高峯ナルヲ示スモ郡中ノ人々誤認ナランカト疑エリ, 22年信濃教育会編輯地図ニ初メテ白馬岳ニ冠スルニ蓮花岳ヲ以テセシヨリ郡中ノ人々驚キテ越後越中ノ地誌ヲ調査シ, ソノ名称蓮花岳ナルコトヲ知レリ, 然レドモ陸軍省白馬岳ノ名称ニ從フニヨリ強テ他國ノ稱ヲ用イルヲ要セス)
- 1907 〳 39.8 川島緑郎氏一行, 白馬山頂より清水〜柳又〜北又〜小川温泉へ下る。(山岳2年一号)
 〳 40 矢部博士, 白馬山頂にシロウマチドリ新発見。
 〳 40 白馬銅山閉鎖。松沢真逸氏白馬山頂に山小屋を建る。
 〳 40 志村烏嶺, 前田曙山著「やま」刊。志村氏は近代登山の最初から最も白馬を愛した人昭和31年8月83才で実に10数回に亘る最後の白馬登山をした程の人で, 文中の大半を白馬登山記録でうめている。
 〳 40.8 吉沢庄作氏, 祖母谷より清水を経て白馬三山を廻り, 再び祖母谷へ下る。一行9人と人夫を入れ14人, この内大蓮花への地理を知る者は案内の仁次郎以外になし。(山岳5年m43)
- 1908 〳 41 大黒鉦山開く。大正7年迄続く。唐松を越えて牛道完成。
 〳 41 三枝威之介氏一行3人と人夫3人の6名は1日で, 白馬から五竜まで初縦走し, 大黒鉦山事務所へ翌朝2時半着, 翌日は五竜を越え野宿し大川を下り鹿島へ出る。(山岳4年1号m.42.3)
 〳 41 松本女師の河野, 矢沢氏が中心となり, 牧野富太郎氏を招き白馬岳植物採集会を開くイワテトウキ, ハクサンオオバコ, ホガキイチエウラン新発見。
- 1909 〳 42 志村烏嶺著「山岳美観」刊。我国最初の山岳写真集, 白馬2, 立山2, 高山植物2計6枚収録。
 〳 42.8 3〜6日三枝威之介氏大黒鉦山から五竜へ登り, 南五竜沢に野宿鹿島槍へ登はん, 冷沢を鹿島部落へ下る。
 〳 42.8 長野大林区署は, 学術研究以外は一切高山植物の採集を禁ず。(山岳4年3号m.42.11)
- 1910 〳 43 櫻谷徹蔵氏白馬より八方へ縦走する。
 〳 43.9 「黒部山探検」井上江花著。明治42年7月祖母谷〜飯鬼田圃〜大黒岳の記録を載せたもの
 〳 44.1 オーストリー, レルヒ少佐高田58連隊でスキーを教える。
 〳 44.7 高野鷹蔵, 北沢基幸白馬から祖母谷に下る人夫は凡山広太郎, 市三郎, 善次, 美知弥の4人。(山岳6年3号m.44.11)
 〳 44.7 中村孝二郎, 二高二部, 松本三郎は人夫磯吉, 嘉吉, 利雄で大黒鉦山登, 五竜山頂より南肩を下り, 赤禿悪場で野営, 第三の峯八峯を経て八峯通過に3時間半を要す。南槍でキャンプ冷沢を下り大町へ出る。
- 〳 44.8 冠松次郎氏案内広太郎, 徳十をつれ, 白馬より清水を経て祖母谷へ下る。(山岳7号m45.5)
- 1913 大正2 ウェストン第二回白馬登山, ルートは大町〜四ツ谷〜白馬山頂〜四ツ谷〜大町。
 〳 2 北安曇教育会編「白馬岳」刊。小川温泉よりのルートはない, 祖母谷ルートも近年開かれたものとおる。
 〳 2.7 陸地測量部, 五万分の一「白馬」「黒部」「立山」刊。
 〳 2 河東碧梧桐氏黒部川猫又より白馬へ登る(「日本の山水」大正4年)
 〳 2.7 高橋政次郎, 五竜方面より八峯キレット通過。
 〳 2.7 百瀬慎太郎氏一行, 鹿島槍方面より八峯キレット通過。
 〳 3.8 小倉伸吉氏一行全上。
 〳 3.8 吉沢庄作氏黒部川を溯り, 祖母谷より硫黄沢を経て, 中山脊コースでヤリ岳山頂へ出

- 天狗、不帰、唐松を経て大黒鉱山を通り祖母谷に下る。(中青山コースは大部荒れているとある。)
- 1915 ㄥ 3 蓮華温泉は飯山の丸山彦左エ門の所有で、千国栄吉が借りて栄業中(山岳第9年1号)
- ㄥ 4 白馬山荘2棟増築、3.5×3間2棟。
- ㄥ 4.8 京阪神を中心に東京、名古屋、岡山、山口、佐賀から100余名の白馬、穂高への団体登山あり。
- 1916 ㄥ 5 白馬尻小屋新設(以前は石室であった)尚この年信濃鉄道では大町〜四ツ谷間自動車開通、1日2往復。
- ㄥ 5.7 加山竜之助氏一行鹿島槍方面より八峯キレット通過。
- ㄥ 5.8 東久邇宮稔彦王殿下白馬登山(信濃教育635号S.14.9)
- 1917 ㄥ 6.7 木暮理太郎、南日(田部)重治氏一行は宇治長次郎を案内とし、小川谷、朝日岳、白馬、五竜、鹿島槍、針の木峠の全縦走完成。
- ㄥ 6.8 鈴木益三氏白馬から清水、猫又を経て広河原に出、下山、既にこのルート道なし(山岳12年1号)
- 1918 ㄥ 7 離山に石室2号(4×2.5間)の小屋県費で完成、細野青年会が経営する。
- ㄥ 7.8 久邇宮邦彦王殿下白馬登山。
- 1919 ㄥ 8.8 高田輻重隊、大隊長以下21名人馬共戸隠を経て白馬へ入、白馬尻で一泊大雪溪より人馬共全員白馬山頂へ日帰り登山をする。(朝日新聞T.8.8)
- ㄥ 8 「白馬登山案内」高山館「ヤリ山頂に大日如来の座像ありたるを天狗池の岩穴に移し祠る、これは大日岳の大日如来と同時代のものである」とある。
- 「白馬行」中部山岳第15号、影山茂「大日山頂に大日如来を祠るところより大日岳と呼、白馬岳は宗教と関係少なくこれが唯一のもので、今から150〜60年前源長寺の和尚が安置したと伝う」とある。
- 1920 ㄥ 9 白馬岳高山植物天然記念物指定下調査、小泉源一氏により行なわる。
- ㄥ 9.3 慶応山岳部二木末雄、八木森太郎、大島亮吉、小林達也等白馬尻から杓子へのスキーによる冬季試登、これは北アルプスにおける冬季登山の最初の挑戦である。
- ㄥ 9.8 小泉秀雄氏白馬にてクモマツメクサ、クモマミナグサ、チシマツメクサ新発見。
- 1921 ㄥ 10.2 早大舟田三郎一行、大雪溪から白馬岳へスキーによる試登。
- ㄥ 10.4 関温泉笹川速雄、内山数雄一行五名、蓮華温泉より鉱山事務所、鉢ヶ岳、旭、白馬山頂、大雪溪のコースでスキーによる登はん成功(笹川は一本杖、内山は二本杖使用)
- ㄥ 10.8 朝香宮針ノ木〜立山〜唐松〜平川へ下山、矢沢米三郎氏案内す。
- 1922 ㄥ 11 白馬連峰高山動植物、天然記念物に指定。
- 1923 ㄥ 12 白馬大池小屋、石室1号新設。
- ㄥ 12 大町小学校にスキー研究グループ生る。丸山光治氏などの名が見える。
- 1924 ㄥ 13 猿倉、ヤリ温泉小屋新設
- ㄥ 13 蔵平スキー講習会開く、黒田正夫夫妻、富井宣威ら講師となる。これは北城小の馬場治三郎氏が松沢直逸氏にガイドのスキー必修をすすめて開かれたもの。
- ㄥ 13 女子の白馬登山急増する。松本女専200名を初め、静岡、前橋高女などの団体が主で一般婦人の登山は未だ少ない。(朝日新聞)
- 1925 ㄥ 14.2 全日本スキー連盟発会。
- 1926 ㄥ 15.12 スキー研究家高橋健治氏、唐松岳登山、一ヶ月逗留し三高、京大生にスキー指導す。
- 昭和1 白馬岳敵冬季初登はん、明治大学山岳部(「日本アルプス」S5新光社)
- 1927 ㄥ 2.8 大日岳山頂の鉄剣、大池の鳥居建立。
- ㄥ 2.12 早大パーティー11人針ノ木雪溪で雪崩にあい4人死亡。
- ㄥ 2 蓮華温泉の所有は丸山彦左エ門より糸魚川の田原幸治郎氏に移り、営業を続ける。
- 1928 ㄥ 3 サカサマ谷〜恵振〜朝日〜白馬のルート下新川郡山崎村で開く。
- ㄥ 3.4 四手井綱彦氏一行の京大パーティー五竜登はん(三高部報第6号)
- 1929 ㄥ 4.3 神戸商大田中伸三氏一行唐松岳登はん。(やま第22号)

	◇ 4	陸地測量部、部分修正して五万分の一地図発行「白馬岳及立山近傍図」三色刷。
	◇ 4	離山に県費補助で村営石室小屋建設。完成7年。猿倉に白馬スキー小屋できる。冬季小屋としては北アルプスで乗鞍鈴蘭小屋と二ツのみ。
	◇ 4	6月関西学生山岳連盟、11月関東学生山岳連盟結成さる。
1930	◇ 5.1	四ツ谷案内人組合スキー講習会1月30日～2月6日講師関山連派遣の商大手塚晴雄早大江口新造、参加者40数名。
	◇ 5.3	神戸商大田中伸三氏がガイド丸山静男と白馬主稜初登はん。
	◇ 5.3	立大逸見真雄氏パーティー鹿島槍初登はん(立大部報第2号)
	◇ 5.3	立大パーティー白馬～唐松間縦走成功。
	◇ 5.5	「白馬山高山植物調査」文部省編刊、天然記念物指定後の変化と保護の状態につき、S.3年7月本田正次、竹中要氏の調査報告をまとめたもの。
	◇ 5夏	冠松次郎、渡辺漸氏等鹿槍東尾根初登はん。
1931	◇ 6.3	京大パーティー伊藤氏他、五竜～鹿島槍間縦走成功。コースは落倉～天狗原～蓮華温泉～朝日岳～小川温泉。
	◇ 6.3	立大堀田弥一氏ら黒部川側から鹿島槍、五竜に初登はん。
	◇ 6.	清水小屋改築(富山営林署所属)
	◇ 6.	神ノ田圃早大ヒュッテ新築。北アルプスで学校山岳部最初の山小屋。
	◇ 6.5	田中一郎、甲南高校西村氏鹿島槍尾根登はん。
1932	◇ 7	黒菱、唐松、八峯キレット小屋新設。
	◇ 7.12	立教大湯浅徹氏ら翌8年1月にかけて、白馬から爺ヶ岳種池小屋までの後立山全山縦走成功。
1933	◇ 8	白馬館では洋室付二階建新館山頂に建設、全13年にはこの裏に二階建一棟増築。大池梅池小屋新設。
1935	◇ 10	遠見小屋新設。
	◇ 10.8	奎王殿下同妃殿下白馬登山。
1936	◇ 11	白馬山頂郵便局舎新築。
1938	◇ 13	北城村でも離山に8×5間二階建新館建築。
1939	◇ 14	白馬岳宿泊所共同経営始まる。
	◇ 14	「黒部奥山と奥山廻り役」中島正文、これは山岳32年1号、33年1号、34年1号に発表するものを別刷合本したもので、加賀藩政下の黒部奥山を研究した貴重な文献である
1940	◇ 15	白馬観光協会誕生。
	◇ 15.8	久通宮家彦王殿下の白馬より針ノ木への縦走。

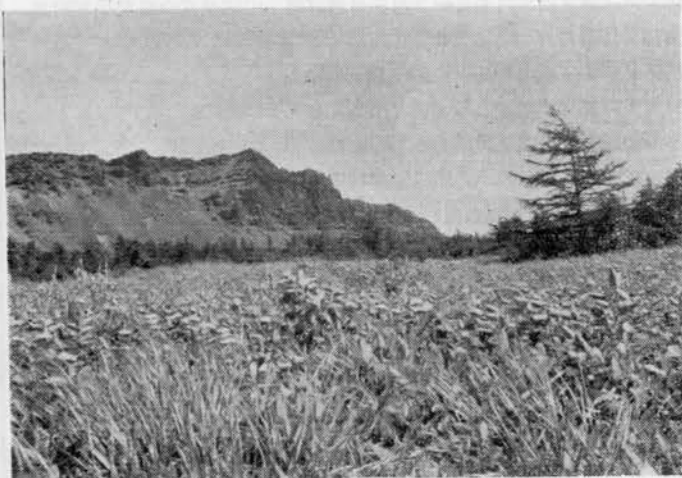
勤務の間をみてはこゝ数年来、白馬岳周辺の山の資料を集めているが、仲々思うようにはかどらない。現在迄に得られたものを整理するつもりで未完成のまゝ載せてみた。未だ村内古文書の調査と、北安曇郡誌歴史部門の

先生方の調査したものについて目を通してないことを附記し、大方諸賢の御指導と資料についての御教示をお願いする次第である。

(山博調査員・白馬村公民館主事)

高原を歩いて

久保田 稔



湯の平高原にて蛇骨岳大口壁を望む

私は大町での六年間の山歩きで、高原歩きといえば、三年前の晩秋の美ヶ原を歩いたのが最初で最後だった。

その時の印象は強烈に私の脳裏に焼きつけられている晩秋の高原は深いもやにつままれていた。

多くの仲間たちと談笑しながら歩いていた私だったが、いつのまにか仲間達と離れてひとりになっていた。でも仲間の所へ戻りたいとも思わなかった。むしろ、こうしてひとりでもいつまでも歩きつづけていたかった。

その時何を想い、何を考えていたのかははっきり思い出すことはできないが、とてもロマンチックなムードの中にひたりきっていた。やがて山本小屋の灯が見えてきた時、小屋への道を探し、仲間の姿を求めて右往左往した時そのムードに一応の終止符が打たれたのだが……。

北アルプスのような高い山々のない佐久へきてからは今までのようにスポーツ登山の機会もそうたびたび持つ事も出来ず、自然に高原歩きに足を踏み入れるようになった。

この一年間は、スポーツアルピニズムの厳しさの中に求める喜びへの激しい思慕と、ワンダーフォーゲルのソフトなムードへの期待との交錯の一年であった。

石尊山

六月下旬、軽井沢町の町民登山に同行して始めて浅間高原の一角へ足を踏み入れてみた。

それは、小諸出てみりゃ浅間の山に今朝も煙が三筋立つ。との俚謡の文句にもうたわれている浅間山への代表的な登山口の一つである追分口から石尊山を経て、天狗の露地へ出るコースであった。

町民登山とはいっても、時期的にまづかったのか十数名の参加者しかなく、集団登山に見られる固苦しいよう

な雰囲気もなく、なごやかなものだった。

ひとしきり別荘地帯を歩くと、やがて広々とした野原に出た。あやめが今を盛りと咲き乱れる中を三々五々歩くことしばし、森林帯に入る。石尊山近くまで森林帯は続いているが、途中で血の池というのがある。これは小さな泉より沸き出る水が、附近の土壌が特殊なのだろう酸化されて鉄がさびたような色に変わって流れ出したもので池というよりは沼といった方がいいだろう。

石尊山に登ると、佐久盆地が一望のもとに見下すことが出来、浅間山も眼前に（というよりはむしろあまり近すぎて目の中に

入らぬといった方がいいかも知れぬ）聳え、特にこの附近はつゝじの群生が多く、その最盛期はさぞ見事だろうと想像される。こゝで昼寝をしたり、あるいは歌を歌ったりしてレクリエーションに興ずるのもいいと思う。

これから先、昔天狗が箱庭をつくるつもりだったといわれる天狗の露地へ出て、小諸へ下山するコースにも未練があったが、コンディションの悪い人がいたので、その人につき添って下山した。

私が特に関心を持ったのは、このコース石尊山附近は冬山の初歩の訓練の場として、特に山スキーの訓練をも含めて使えるのではないかという事だった。

湯の平高原

七月の中旬、食糧とツェルトをザックにつめこんだ私は、小諸駅前から草津温泉行きバスに乗り込んだ。バスに乗ること七十分、車坂峠で降りた時は四時半というのに厚い雲に覆われて、あたりは陰鬱な感じだった。こんな時は早く寝てしまおうに限ると、附近の森林の中にもぐり込んだ。

あまり早く寝たためか夜中に目を覚してしまった。冷たい空気にもふれようかとツェルトからはい出してみると、外は真暗闇かと思いきや、深いきりに包まれているとはいうものあたりの木々がぼやんと浮んで見ゆるほどの明るさであった。

夢の中をさまよひ歩いているのか、本当にさまよひ歩いているのか……ふと立ち止って熊籠の中に腰をおろしてじっとしていると、ひしひしと迫り来るかと思えば、すーと逃げていくもやに、われひとり大自然の中にあれりと心細く感じたり、あるいは生への喜びを感じたり……何台も登ってくるバスのエンジンの音に再び眠りから覚めた私は、簡単な朝食をすませると森林の中からはい出

した。

このまゝ真先ぐ行けば草津温泉、白根山へ、左へステップをかえれば高峰高原へ、右へきびすを返せば黒斑山湯の平高原を経て浅間山へ。私の足は右へ向けられた。

登山路は非常によく整備されており、急な登り下りがあるわけでもなく、黒斑山まではどこにでもあるような平凡なコースであった。草すべりという急な斜面を一気に駆けおるとそこは湯の平高原である。

湯の平高原は、この寂寥とした浅間山に隣りあわせてこのような平和な情緒豊かな所があるのかと驚くほどの秘境である。

あまり先を急ぐ事もあるまいと、草のしとねに寝ころんで黒斑山から蛇骨岳にかけて車面の火口壁を眺めていると、西部劇によく見られるシーン観馬車隊が草原を走っている時、小高い岩稜からインディアンがあらわれてしばし打ち合いが始まる。やがて……こんな連想が沸き起ってきた。

が、一担浅間山へ足を踏み入れると、天国から地獄へとといった感じで、草木の一本もない砂礫の中を灼熱の太陽のもと無味乾燥な登山となった。

荒船高原

急に降り出した雨はなかなかあがりそうもなかった。「こりゃ、今日はだめだな」そうつぶやきながらも私はザックへものををつめる手を休めようとしなかった。

「連中はどうする積りだろう。どうせ食糧をごっそり買い込んで、うらめしげに空をみあげていることだろう。まあいいや、いってみるか」と、ともかく洋傘をひろげてバスの停留所まで行ってみる事にした。

ところがものすごい雨で、ものの五十米も行かぬうちにこれ以上歩く事が出来なくなってしまった。正面から吹きつける雨には洋傘なんてとても役に立たぬし、すでに道路わきの小路ははらんで道路も小路も区別が出来ぬ有様で、止むなく道路わきの倉庫にとび込んだ。雨はまもなく親指大の雹に変わった。

三十分ほどしてやゝ小止みになったのでバスの停留所に行ってみたが、すでに最終のバスは発車してしまっていた。

八月初旬、白馬岳へ登ってみたいという職場の初心者に登山の基本を教えながらトレーニングを兼ねて、土曜日の午後から日曜にかけて、志賀牧場から神津牧場一帯の高原を歩く計画をたてた。

最終バスに乗りそこなった私たちは予定を変更して、荒船高原から神津牧場の方へ予定の逆コースを歩く事にした。

当夜は初谷鉱泉泊りとなり、バンガローに泊る予定が上等な部屋での自炊となった。山あいのせゝらぎのほと

りにある初谷鉱泉は胃腸の名湯として名高いが、山登りのまねごとを始めてするという人の担当した豪勢な食糧を平らげ、山の話に熱中して、翌翌、初谷鉱泉を出る時「俺達はゆうべ湯につかったかいなー」と気がついた時は後の祭り。

紅葉の頃もう一度訪れてみたい所である。

初谷鉱泉から荒船山までは、たんたんとしたハイキングコースである。1422米の荒船山は南北に細長い台地の親分のような山で、明るい林の中を歩くかと思えば、フォークダンスやパレーボールに興じたくなるような草地を歩いたりして足取りも軽く、鼻歌まじりで頂上で昼めしにしようとして歩いているといつの間にか大絶壁の上に来てしまった。皆でどこが頂上だったのだろうと考えてみたがつついっわからなかった。

絶壁の上には集団ハイキングのトレパン姿の中学生、家族連れグループ、一般登山者などさすがににぎやかであつたが、マナーの悪さと、紙屑、空缶の散乱する状況にはせつかくの楽しい気分もそこなわれてしまった特に案内板を倒して道のまん中で尻の下にしていた若い男のグループに出くわしたが、こんな事は始めてだ。注意してもとの通りに直させたが、私のグループの、彼らと同じ年頃のT君が「俺だって何の気なしにあゝいう事をするかも知れないねえ」と、初めてあゝいう事は悪い事だと気がついたような事をいう。

そんな不快な気分をほぐしてくれるのが妙義山系、神津ドライブウエー、浅間山などの展望だ。

こゝから、ガーデンハウスは眼下に見えるが歩いてみるとなかなかどうしてたっぷり一時間はかゝった。何よりも背中への荷の重さが苦になりだした。

他の三人はサブザックかナップザックの軽装だが、私はシュラフ、ツェルト、ホェーブス、石油などの外に始めて山登りをする連中を嬉しがらせてやろうと大きなスイカをしのばせていたので、いくら私が歩く事に慣れているとはいっても、普通の道ではこたえた。ガーデンハウスでスイカを割って食べた。多くのハイカーたちのやられたとといった驚きと羨望の目差しの中を得意満面むしゃぶりついた。

ここから物見平、神津牧場へはたいして時間もかゝらぬのだが、どちらへ行くにも帰りのバスとの関係があまり時間的余裕もないので、再び秋にもっと多勢の仲間を誘って訪れる事にして、内山峠を経て中込に下山した。信州の耶馬溪といわれる奇岩の乱立する内山峠を眺めながら考えた。この秋はできるだけ附近の数多い高原に遊んでみよう。

(大町山の会々員)

博物館だより

8月18日 文化財保護委員会品田技官他、噴湯丘調査

9月3日 国土開発博覧会にカモシカ、ライチョウ他
の資料貸出し

大町に降ったヒヨウ

7月29日の夕方雷雨にまじって3cm大の降雹があり、その時撮影したもの。雹は主に積乱雲の中で出来ると考えられ、6,000m以上の低温部で結晶した氷晶が落下してくる時、途中の過冷却の水滴を付着氷結させて大きさを増す。写真のものも生成の過程を示す同心円状の構造をしている。大きいものは鶏卵大に達することがある。

松本深志高等学校 平林 照雄

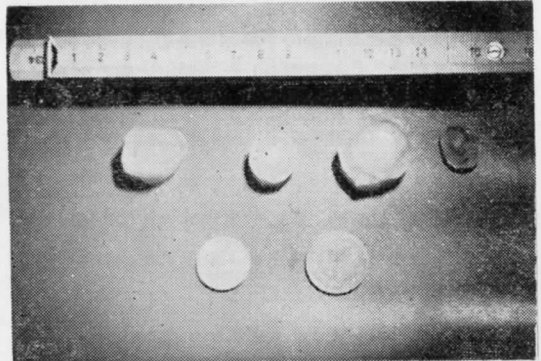
傷ついたカッコウ

長 沢 修 介

先日沢山の燕が家の前の電線に群って日一日とその数が増えて行くと思ったら、昨日は一羽もその姿を見ることができなくなった。多くの夏鳥達は今渡りの準備に急いでいるものや、もうすでに渡っているものさえある。

このカッコウも今年生まれ、育った土地を去りインドやフィリピンの暖い所で暖い冬を過ごそうと渡りを始めた時、翼を痛めて思うように飛ぶことができなくなってしまった。それを私の近所の動物好きのお婆さんに助けられ、これは何という鳥でしょう。と私の所へ持ちこまれた。カッコウですよ。あの「カッコウ」と鳴く、へえー、この鳥がねえ、まるでタカじゃないですか、と驚ろくお婆さんに、この鳥の他の鳥にヒナを育ててもらう習性や、羽色がタカに似ている利点など色々の習性を説明し早く傷を直して南へ飛ばしてやることをすゝめる。幸にも傷は小翼羽のつけ根の所を何かに打ちつけたらしく少々はれて血がにじんでいる程のものであった。エサは何か良いでしょうと聞かれ、ケムシが好物ですとは言ってもそれを毎日沢山取って来るわけにも行かず、結局キャベツにつくモンシロ蝶の幼虫を与えることにする。四日位した夕方、毎日エサをやり静かな所に置いたら翼も直った様子ですから明日は丁度日も良いし帰してやろと思うから明日の朝来て下さいと言って来た。動物好きのお婆さん日まで選んで飛ばしてやるとは、その心の暖かさこそカッコウも身にしみたらうと思いつきの日の早朝訪れて、無事南に帰り、又来年帰って来て美しい声を聞

9月13~15日 青森県下北郡大畑営林署で保護されていたカモシカ(推定生後3ヶ月半)を大町で飼育観察するために、引き取る。これには、全日本空輸株式会社、国鉄各駅及び長野県出身の方々、営林署員その他大勢の人々の協力によって無事完了した。厚くお礼申し上げる。



かしてくれることを願いつつそっと枝に止め、放してやった。



お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料300円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第8巻第8号 1963年9月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上仲町
信州印刷大町工場